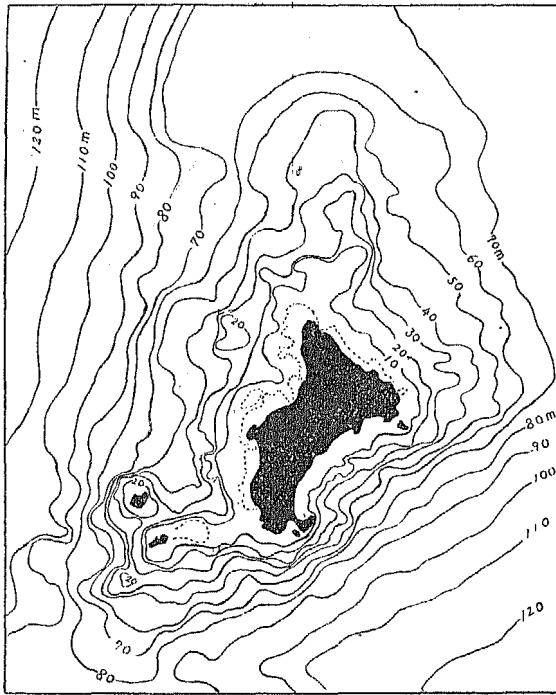


飛島隆起陸塊と其の平面形

大 橋 良 一

山形高等學校の安齋教授の花崗岩塊の發見に依つて飛島の地質的性質は大に明かにされた、今まで考へられてゐたような、佐渡・粟生島・飛島・男鹿を連絡する第三紀新層の一山脈を否定して、其の



第一圖

代りに飛島・朝日・飯豊の各花崗岩山塊の南北列を肯定しなければならぬ、此の事に就ては目下執筆中の北日本地體構造論に述べて置くが、飛島を斯くの如く花崗岩の隆起陸塊であるとすれば、其の平面形は如何なる形であらうか、これを決定する爲めに海圖に據つて等深線を描けば第一圖の如きものが出来る、更にこれに基いて陸塊の平面形を想像するときには第二圖の如きものとなる、然しこれは眞の形を示すや否や明でな

飛島隆起陸塊と其の平面形

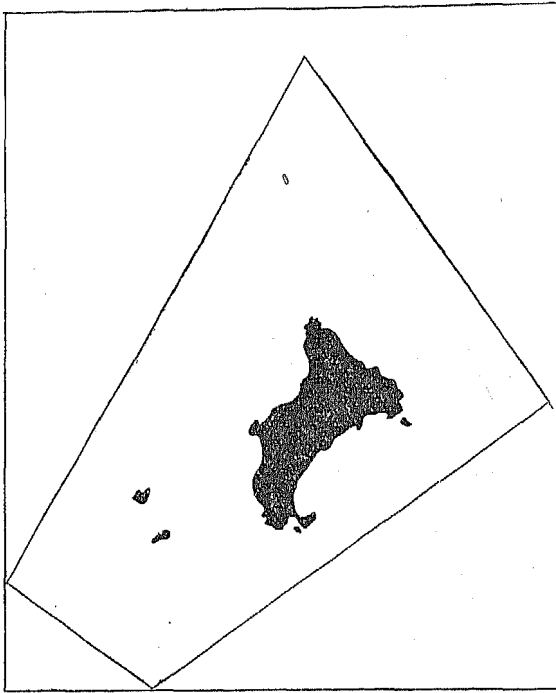


圖 二 第

の孤島若しくは岩礁であつたであらう、其の後少しく沈下して海底臺地の状態にあつたものが、第四紀敷島時代に入つて隆起して今日の如く水面上に露はれたのであらう、現在の飛島の表面は我々が六十米段丘（或は第二階段丘ともいふ）と呼んでゐるものである。要するに飛島は振動的昇降運動が伴つてはゐるが中新統時代から今日まで繼續して隆起の状態にある花崗岩陸塊と見なすことが出来る。

い、眞の形はもつと北方に攢つてゐるのではないかとも考へられる、現在の飛島は此の飛島陸塊の頂上に乗れる水成岩（第三系中新統ならん）と凝灰岩より成り、東西に近い褶曲軸を以て緩かな褶曲をしてゐる、其の最下層に含まるゝ多數の花崗岩塊は、其の大きさよりしても亦角張れる點から考へても、決して遠く運ばれて來たものに非ずして、飛島自體を構成するものに相違ない、此の場所は第三紀下部中新世の頃には花崗岩